

5月から6月にかけて、内モンゴルで暴動が起きた。今回はその現地調査報告である。

結論から先に言えば、今回の内モンゴル暴動は、「チベットやウイグルの暴動の再々現」にはならなかったということである。その意味では、内モンゴル暴動発生後の事態の推移は、かまびすしく民族紛争として、これを報道した日本のマスコミや反中・嫌中チャイナウォッチャーの期待を大きく裏切るものであった。その理由は、下記によるものと考えられる。なお、日本のマスコミではあまり報道されなかったが、6/24、今回の暴動の発端となった錫林浩特市西烏珠穆沁旗の付近で蒙古族の便乗抗議行動が起きた。今回、私はこの現場も取材した。そこから見えてきたのは、いつもの中国の他の暴動と変わらぬ状況、つまり悪徳資本家と結託した中国政府地方幹部と、したたかに利益を貪り取ろうとする中国人民衆(今回は蒙古族)の醜い銭ゲバの光景であった。これをことさらに中国政府の横暴と、虐げられた蒙古族の民族紛争という構図として誇張して捉えることは、誤りである。



- ・内モンゴルの1人当たりGDPは、4万7174万元(約59万円)で、広東省を上回り全国第6位でそこそこ豊かであり、蒙古族全体がその利益の分け前と恩恵に預かっているという実情を、無視することはできない。ただし鄂尔多斯など都市周辺部と遊牧民の収入格差、東西蒙古の地域格差、炭鉱開発などの自然環境破壊という問題が新たな不満の種になっている。
- ・西烏珠穆沁旗は鄂尔多斯に次ぐ炭鉱地帯で、5年前ほどから開発され始め、今後の発展の可能性が大きな地域であり、地元蒙古族住民もその恩恵に預かりたいと考えているものが多い。
- ・2011年度は内モンゴルの民衆生活改善に、中央政府は788億元(約9800億円)を投入する計画を発表しており、地元住民は、その恩恵に預かることができる。また蒙古族の学生には学費免除政策や大学入試の際に10点プラスの優遇政策などがある。
- ・チベット族やウイグル族と比較して、蒙古族の不満はより軽微であり、より漢族への同化が進んでいると思われる。ただし不満がないわけではない。漢族が蒙古族の先祖伝来の草原を蹂躪し大儲けしていることに対し、自分たちの儲けや補償が少ないことに不満を抱いている。
- ・しかし多くの蒙古族は不満を募らせ、政権転覆、民族独立を願う方向ではなく、現在の地位や身分を確保しながら、より多くの利益を獲得しようとするものだと思う。
- ・今回の暴動は偶発的なもので、計画的なものではなく、蒙古族の中に確固とした指導部もカリスマ指導者もない。
- ・暴動に参加しようとしたものは、ネットや携帯電話のメールへの付和雷同派が多く、野次馬的な参加者が多い。したがって容易に押さえこまれてしまった。
- ・政府側は、チベットやウイグルの暴動処理の中で、学習効果を積んでおり、なによりも暴徒を未然に押さえ込むことの重要性を強く理解していた。
- ・今回も政府側の暴動鎮圧の迅速な対応がなかった場合、蒙古族の学生や遊牧民が暴徒化していた可能性はある。
- ・また政府側は今回の事件発生現場の当事者に、素早く補償金を支給し、同時に西烏珠穆沁旗の共産党書記を解任し、内モンゴル地域での中学・高校の「学費免除・教材費免除」の範囲を広めることにした。
- ・6/15、温家宝首相は国務院常務会議を開催し、「内モンゴル自治区の発展を加速させ、生活水準の改善や社会安定を図る方針」を決定した。また同会議は、「2015年までに自治区内の森林被覆率を21.5%に、草原被覆率を43%に引き上げ、農民や遊牧民の生活水準を向上させるためにインフラ建設を加速させ、2020年までに、住民の平均所得を全国平均を上回る水準に引き上げる方針」を打ち出した。
- ・最近、蒙古族を含む多くの中国人民は、抗議行動を行えば、必ず政府や企業がなんらかの譲歩を行うので、その結果、多くの恩恵(アメ)を受けられるということを熟知している。つまり政府の制裁(ムチ)を覚悟の上で、行動を起こすことが多い。
- ・今回の暴動処理は、政府のアメとムチが成功した見事な実例である。ただしアメを配分する財源が枯渇したとき、ムチだけでは国民を統御できないことは明白である。このことは民族紛争だけでなく、中国全土の暴動にも適用できる。
- ・なお、錫林浩特市西烏珠穆沁旗には、1995年～2008年までの間に、民生支援として日本政府から200万円の援助資金が投入されている。

暴動評価基準は文末に掲示。

1. 5/10、錫林浩特市西烏珠穆沁旗の薩如拉錫力嘎查で、蒙古族牧民が漢族のトラック運転手に轢き殺される。

暴動レベル0。

- ・マスコミ報道：5/11早朝、錫林浩特市西烏珠穆沁旗の薩如拉錫力嘎查で牧畜を営む蒙古族の莫日根氏が、日ごろから石炭運搬大型トラックが蒙古族遊牧民の草原を勝手に走り回り、周辺の牧場と民家に大きな被害を与えているため、抗議するため大型トラックを阻止することを30人ほどの仲間と計画し、当日トラックの前に立ちはだかった。そのとき大型トラックの漢族運転手は、莫氏を轢き殺し逃げ去った。すぐに公安が追いかけて、その日の午後、西烏珠穆沁旗から南へ100kmほど行った林西県で逮捕した。事態を重く見た地元政府は、ただちに莫氏の家族に56万円の現金、56㎡の家1軒、子供2人と妻に毎月1800円を支給することに決定した。

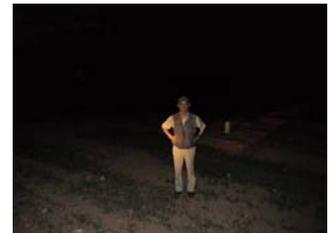
このトラックの漢族運転手は莫氏を轢殺する前、夕食時に酒を飲みながら、「くずモンゴル人を轢き殺しても、せいぜい40万円払えばチャラにできる」と公然と言い放っていたと伝えられ、また莫氏の轢殺現場写真がネット上で飛び交ったため、これらが蒙古族民衆の怒りに火をつけた模様。ただし本当にそのように言ったかどうかは不明。

なお5/14にも、鉱山に勤務する蒙古族労働者が自動車事故で死亡した。詳細は不明。

6/08、内モンゴル自治区錫林郭勒盟の中級人民法院は、莫氏を轢殺した漢族運転手に死刑判決を言い渡した。

- ・実情：薩如拉錫力嘎查の炭鉱は、西烏珠穆沁旗の中心部から100kmほど離れており、草原の真ん中を延々と1時間以上走ったところにある。そこまで未舗装の道路をタクシーで埃を巻き上げながら走ってみたが、その道路がマスコミ報道のように、自然破壊をしているようには感じられなかった。ときどき草原の中に道路らしきものがあったが、それは遊牧民の家に通じる道路であった。たしかに炭鉱への幹線？であるその未舗装道路を、数百台の大型トラックが行き交ったら、草原はかなり荒れるのかもしれない。残念ながら、事件以後、炭鉱は閉鎖されており、その壮絶な光景を見ることはできなかった。ただし道路の舗装工事は着工されていたので、近い将来、砂埃などの環境破壊問題は解決されるのではないだろうか。

- ・私見：莫氏の轢殺現場を探して、蒙古族の民家を尋ねて聞きまわった。そのうちに夜の9時を回ってしまったが、炭鉱現場から30kmほど離れた地点の草原の真っ只中で、運転手が地元の蒙古族から教えてもらったのはこの辺だというので、降りて現場写真を撮った。その現場で、私は「この地点は炭鉱からかなり離れているので、補償の対象にはなっていないのではないか。そのことが蒙古族遊牧民の大きな不満の原因ではないか」と考えた。暗闇でなおかつ周辺には人家もない場所であり、運転手も怖がったのでそれ以上の探索はやめた。



《 轢殺現場？にて 》

2. 5/15以降、西烏珠穆沁旗県人民政府前で抗議行動。 暴動レベル1。

- ・マスコミ報道：5/15以降、半月間ほど、蒙古族民衆は怒りが収まらず、西烏珠穆沁旗県人民政府前に集合し、政府に抗議をした。多いときには1000人ほどが集まり、政府の窓ガラスを割るなどの行動に出た。
- ・実情：たしかに西烏珠穆沁旗県人民政府前で抗議行動は半月ほど続いたというが、それほど過激なものではなく、投石し窓ガラスを割る程度であったという。

《 西烏珠穆沁旗県人民政府前 》 →



3. 5/24～27、錫林浩特市人民政府前で抗議行動。 暴動レベル1。

- ・マスコミ報道：5/24～27、西烏珠穆沁旗の薩如拉錫力嘎查の轢殺事件をネットや携帯電話のメールで聞いた錫林浩特市の蒙古族の学生や市民が錫林浩特市人民政府前で抗議行動。5/27には、遊牧民や学生数百人によるデモ隊と300人以上の武装警察が衝突。40人以上が連行。 ※錫林浩特市人民政府前の抗議行動については未検証。

4. 5/30、呼和浩特市新華広場に蒙古族遊牧民や学生が集合。 暴動レベル0。

- ・マスコミ情報：5/30、内モンゴル自治区の区都、呼和浩特市の新華広場に蒙古族の遊牧民や学生が1000人余集合。広場周辺では数百人規模の武装警察が出動し、厳重な警戒をしいた。数日前から、ネットや携帯電話のメールで5/30に新華広場に集まり、抗議行動を起こそうという情報が流されていたので、当局は事前に厳戒態勢で臨んだ。新華広場に面した「内蒙古国際大酒店」は平常通りの予約を受け付けたが、広場への車の進入が禁止された。また市内の大学はすべて、武装警察の監視の対象となり、学生たちの外出を禁止するなどして、学内に閉じ込めた。なおこの状態は半月ほど続いた。



《新華広場にて 後ろは人民解放軍兵士》

- ・実情：ネットや携帯電話のメールなどで情報を知った蒙古族の学生や遊牧民は、5/30、呼和浩特市新華広場に集結したが、武装警察によりただちに解散させられ、広場は立ち入り禁止となった。その後、この状態は半月ほど続き、蒙古族の

学生や遊牧民が新華広場の中に入り抗議行動を起こす余地はまったくなく、完全に押さえ込まれた。ただし新華広場の周辺では、毎日、少しずつ小競り合いのような事件が起きていたという。

蒙古族の学生が多いという「内蒙古師範大学」では、30日の早朝から武装警察200人ほどが警戒に当たり、「学生の無許可外出を禁止」するなどした。なおこの武装警察は大学の正門から50mほど離れたホテルに寝泊りし、半月間ほど大学を監視していた。市内の各大学にも同様の措置がとられた。

私が、7/14に呼和浩特市新華広場に調査に行ったときには、広場は全面開放されており、ちょうど市政府の「ハイブリッドバス導入式典」が行われており、広場全体に60台ほどのハイブリッドバスが並べられていた。そこには300人ほどの関係者に混じって、人民解放軍の兵士が50人ほど参加していた。通常、このような式典に兵士が参加することはなく、その理由を付近の人に聞いてまわったが、誰も答えてくれなかった。ただし兵士たちには、まったく緊張感がなく、だらだらとしていた。いずれにせよ、呼和浩特市にはラサヤウラムチのような緊迫感はまったくなく、武装警察の姿などや騒動の痕跡など、市内のどこを見回しても見つけ出すことはできなかった。チベットやウイグルの暴動では、半年後でも、ほとんどの街角に武装警察が機銃を持って立ち、10人単位の武装警察が常に街中を巡邏し、危機感がみなぎっていた。それと比べると、ここは天地ほどの差があった。

地図を見ていると、市内の外れに回民街という地名の場所があったので、そこに行ってみた。そこには道路を挟んで両側に、黄金色の回族建築が立ち並んでいた。その街並みは1kmほど続いており、看板には2006年に完成したと書いてあった。回族の住民に聞いてみると、この場所に回族は4~5万人集中して住んでおり、呼和浩特市全体では15万人ほどいるという。この街は、回族の資本家と政府が協力して作ったもので、観光の目玉にもなり、この地の回族全体がこれで潤っていると話してくれた。今回の蒙古族の騒動についての意見を聞いてみると、「われわれ回族には関係がないことだが、馬鹿げたことだと思う」と言った。

なおその近辺に、ウランフ記念館があったので行って見たが、参観者はチラホラだった。

- ・私見： 市政府はネットなどから、事前に蒙古族の抗議行動を察知しており、それを完全に制圧し、暴発を防いだ。これは当局側がチベットやウイグルでの教訓を活かした結果であるし、蒙古族側の組織の弱さ、ネットや携帯電話のメールでの決起のよびかけの脆さを露呈したものであると考えられる。

5. 6/24、赤峰市巴林左旗県の白音諾爾鎮で、鉛採掘会社への蒙古族遊牧民の抗議行動。 暴動レベル1。

- ・マスコミ報道： 6/24、赤峰市巴林左旗県で、蒙古族遊牧民が鉛採掘鉱山から排出された水により、草原が汚染され、大量の家畜が死亡したとして、鉱山事務所前で抗議行動。陳情には500人が集まった。武装警察50人が駆けつけ退去させたが、その際、年配の女性を含む4人以上がけがをした。複数の逮捕者が出た模様。
- ・実情： 6/24、巴林左旗県(赤峰市から北へ300kmほどの場所)の白音諾爾鎮(巴林左旗から北西に100kmほどの場所)にある鉛鉱山の事務所前で、周辺の蒙古族遊牧民が鉛鉱山から排出される有害な水に対して、補償の増額を要求して抗議行動。事務所前に蒙古パオを作って200人ほどが座り込んだ。周辺村落から、1戸に1~2名の割り当てで抗議行動への参加が要請されていた。武装警察も駆けつけたが、大きなトラブルにはならず、鉱山側がただちに1人当たり250元の補償金を追加で支払うことと、汚染されたという牧草地を復元するという約束をしたので、村民は解散した。
- ・内情： 7/15、現地はきわめて平穏で、騒動の痕跡はまったくなかった。周辺の遊牧民もこの鉱山に勤めたり、鉱山関係のビジネスに携わったりしている人が多く、その人たちにとっては今回の騒動は迷惑だったという。しかも周辺の遊牧民はすでに鉱山側から補償金を受け取り、ある程度、この鉱山を承認していた。しかし今回の一連の内モンゴル騒動を見て、補償金の増額要求行動に出たのである。いわばこれは便乗抗議行動である。遊牧民間の内部矛盾もあり、この地の騒動は早期に収拾された。



《 鉛鉱山事務所前で 》 →

《 今回の内モンゴル暴動についての他の識者の調査報告や見解 》

1. ジェトロ香港の花木出氏の調査報告

花木氏は6/07に呼和浩特市に入り、調査を行い、レポートを書いている。その一部を以下に紹介する。

(呼和浩特市は)町の印象としては意外に小ぢんまりしており、緑が多い。しかし道を一步入るとドブの匂いがきつい小道があり、一般民衆の生活水準は中国の他の都市より低い印象を受けた。町の中心部には大きなショッピングセンターがあり、ポルシェカイエン等の高級車が泊められているかたわら、他の都市ではあまり見ないロバの果物売り(周辺の農村から農民がロバに果物をひかせて町に来て売る)を見かけた。車も多く、車種も高級車が目立ち、豊かな人は豊かであるという印象を受けた。一方、この町でわずか1週間前に、中国中央指導部を身構えさせる大規模デモが起きたという印象は正直全く受けず、市民生活は完全に平穏に復帰しているように見受けられた。

こうしたことから、①今回の内モンゴル自治区でのデモは、しばらく盛り上がり省都に波及したものの、自治区書記自らの積極的な対応で迅速にその火が消されたこと、②しかしながら根っこにある貧富の格差は大きく、構造的な事情は変わっていないため、将来こうした問題が再燃する可能性は十分にある、と考えた。

しかしながら、最近、北京に戻り、有識者と本件について話をしたところ、その有識者は以下のとおり私の思いつかなかった点を指摘した。すなわち、モンゴル族は、数民族であるが、遊牧民優遇政策により毎年放牧地1ムー当たり600～700元の「放牧地保護手当」を支給されており、放牧面積も広大であることから事実上働く必要がないほど豊かであること、放牧民からの羊の買い取りは、漢族からの羊の買い取りより1頭当たり5元上乘せされており、この仕組みを悪用して漢族から羊を譲り受け自らの羊として売る「偽造羊」売却により多額の補助金を得ている者もいること、一方、駅前や街中に多く見られた貧しい身なりの農民はその多くがモンゴル族ではなく河北省あたりから流入してきた漢族で、モンゴル族の下請けとして営農・放牧等に従事している者が多いこと等である。この話を聞いて、こうした構造は長江三角州周辺でもよく見られる構造、つまりもともと農家は賃金の高い都市に出稼ぎに行き、自らの農地は田舎から出稼ぎに来た農民に小作させ、更にそうした出稼ぎ農民に家を貸して家賃まで取るやり方と同じではないかと思いついた。

したがって、貧富の格差については、単純に漢族とモンゴル族との関係に帰することはできず、むしろ最も底辺にいる「出稼ぎ漢族」の問題を意識して理解する必要があると言えよう。

2. ジャーナリスト: 福島香織氏の見解

新進気鋭の女性チャイナウォッチャーでもあるジャーナリストの福島香織氏は、ネット上で、今回の内モンゴル騒動の内容を詳しく報じながら、最後に下記の見解表明している。

これを、中国ではよくある乱開発と環境破壊を巡る政府・開発サイドと農民・遊牧民の対立という環境問題事件ととらえると、本質を見誤る。問題の本質は「モンゴル族の命は安い」「殺していい」という漢族の少数民族蔑視と、「草原」というモンゴル族の聖域に対する冒涇。そして「モンゴル族は政権転覆を画策する危ない勢力」という当局サイドの根拠のないおびえにある。もし、被害者がモンゴル族でなければ、少なくとも戒厳令を出すような事態にまで発展しなかったはずだ。

かつて私が中国国内で出会ったモンゴル族は、私の家庭教師を含め、漢族以上に漢族社会になじもうと努力してきた人ばかりである。海外で独立運動を掲げる組織の規模も数も、ウイグル族やチベット族に比してずっとささやかだ。しかし、最近はそんなモンゴル族の中にも「結局は戦わなければ何も得られないのか」とつぶやく人も出てきた。バト・ソワさんも、兄の事件を経験した後「私たちの人権は、血を流して戦う覚悟がなければ守れない」と強硬意見を主張するようになった。

今回のシリング盟で起きた一連のモンゴル族デモは、中国当局の実力をもってすれば徹底鎮圧することは可能だろう。しかし、その流血の鎮圧が、長らく耐えに耐えていた蒼き狼の末裔の怒りに火をつけることになるやもしれない。

そういう恐ろしいことは望まない。中国当局には、この内モンゴルの一連の事態に慎重に対応してほしい、と祈るばかりである。

《私の暴動評価基準》

暴動レベル0 : 抗議行動のみ 破壊なし

暴動レベル1 : 破壊活動を含む抗議行動 100人以下(野次馬を除く) 破壊対象は政府関係のみ

暴動レベル2 : 破壊活動を含む抗議行動 100人以上(野次馬を除く) 破壊対象は政府関係のみ

暴動レベル3 : 破壊活動を含む抗議行動 一般商店への略奪暴行を含む

暴動レベル4 : 偶発的殺人を伴った破壊活動

暴動レベル5 : テロなど計画的殺人および大量破壊活動

以上